

# 龍樹造・中論無畏疏（前續）

寺本婉雅譯註

## 「觀行品」第十三(Saṃskāra-parīkṣā)

此に問て言く、四種等は無 (nasti, Med) に終るとも、また苦と外界の存在たる諸行は有るなり。  
此に釋して曰、

(1)「あらゆる虚誑の法は是れ虚妄なりと、

世尊は斯く説き給へり、

一切の行は虚誑の法なり、

この故に其等は虚妄なり」。

「如佛經所説」妄取(虚誑)法なるところの、  
ものは是れ虚妄なりと、

虚誑妄取相 世尊は説き給へり、

諸行妄取故 而して一切行は妄取法なり、

//Chos graṃ bSlu-ba De Rdsun Shes/

/bCom-I-dan ḥDas-kyis De-Skad gSnu/

/ḥDu-Byed Thams-Cad bSlu-baḥi Chos/

/Des-na De-Dag Rdsun-pa Yin//

//Tan-mṛiṣā moṣadharmā yad

bhagavān ity abhīṣata/

Sarve ca moṣadharmāṇaḥ

是名爲虚誑」それ故にそれは虚妄なり。」

sauṣkāra's tena te myiśā//

/ „Was verführerisch (moṣa-dharma), das ist falsch“, so ist vom Erhabenen gesagt.

Alle saṃskāras sind verführerisch, deshalb sind die falsch/ (p. 73)

此に世尊は經中に「かのあらゆる虚誑法は是れ虚妄なり、比丘等よ、是の如く、かの不虚誑なる涅槃の法は、最勝の眞理(諦)なりと説き給へり。そは一切の行は虚誑法なるが故に。この故に其等は虚妄にして、邪妄に顯現するが故に、分別の自性 (svabhava, No-Bo) は空なり。」

① 自性、他性、共生、無因性の生起の四種。

② 此の偈と本偈譯との相違は左の如し。

「世尊は若し法は

虚誑(ならば)それは虚妄なりと説き給へり」

//bCom-I-dan-ṅ-Das-kyi Chos Gran-Ṣhig/  
/bslu-ba De-na bKṣun Shes gSṅus//

③ 般若燈論―「婆伽婆説彼、虚妄劫奪法。」

梵文 moṣadharmamoṣa (奪取する)、藏譯 bslu-baはその對譯なり。

中觀釋論―「彼虚妄法者、諸行妄取故。」

④ 俱舍論―「可見、明、境」

入楞伽經―「所現、獨譯 Scheines (Von Waleser)

此に問て曰、若し所有る法は是れ虚妄ならば、かの二者も亦無の意義に同じきが故に、虚誑の法

の虚妄は云何を成せらるべき。此に釋して曰 (p. 68b)

(2)「若しあらゆる虚誑の法あり、

そは虚妄ならば、そこに何ものか虚誑とな

るや

世尊に由て其を説かれたるは、

①空性(の)完全なる教示なり」

「虚誑妄取者

「若し虚誑法なるところの  
ものが是れ虚妄ならば、

是中何所取

そこに何ものか虚誑せらるゝや、

何説如是事」

されど此のことは世尊によりて、

欲以示空義。」

空性の説明として説かれたり。」

//Wenn, was verführerisch ist, falsch ist, was ist da verführerisch?

Dieses vom Erhabenen Gesagte umschreibt die Leerheit. (p. 73)

若し虚誑の法と説き給へる總てのものは、是れ虚妄ならば、無の義と同じければ、そこに何ものか虚誑となるや。是の如く虚誑は邪妄に於ける顯現なるが故に、虚妄は妄分別の自性空なれば、無の義にあらざるが故に、虚誑の法に由て虚妄を成するに適す。この故に世尊に由て虚誑法なりと説

/bCom-I-dan-ljDas-kyi De-gSuis-pa/

//Stoñ-pa-Nid Yoñs-su bStan-pa-Yin//

//Tan miñṣā moṣadharma Yad

Yadi kiñ tatra muṣyate/ (p. 238)

Etad tu-uktamPhagāta

gñunyatāparidipakam// (p. 239)

かれたることは、空性(の)完全なる教示なりと知るべきなり。

① gñyātā, Ston-pa-Nid. Leerheit (空性) (Von Wallese)

漢譯「中論」：「般若燈論」—空義。

(3) ① 諸の存在は自性なし、

異に變して現するが故に」

「諸法有異故、」 異性の見あるが故に、

智皆は無性。」 諸の存在は無自性なり。」

/Die Dinge sind ohne Selbstsein, weil sie als anders werdend erscheinen. / (p. 74)

世尊によりて虚妄なりと説かれたことは、無と法無我との義に非ず、諸の存在中には補特伽羅の無自性の義なり。③ 何の故に云ふや。位置が異に轉變して現はるゝが故なり。

① 梵文 anyatā-bhāva 漢譯異、變異、異性。

② 般若燈論—「見法變異故、諸法無自體。」

「中觀釋論—「諸法無自性、見有異性故。」

③ ボタラ版 Don-Las Yin-te(義より有りて)

(3) ① 無自性の存在はなし、

/No-bo-Nid-Med dNos-Med-de/



何故なれば、諸の存在は空性なればなり」

/Trai-Phyir dŋos-Knams Ston-pa-Ŋid//

「無性法亦無

「無自性なる存在は有らず

/asvabhāvo bhāva nāsti

一切法空故。」

何となれば諸の存在は  
空性なるが故に。」

bhāvānān gūnyatā yatāh// (p. 240)

/Ohne Selbstsein ist nicht ein Ding (bhāva), wegen der Leerheit der Dinge/ (p. 73)

法の無自性の存在はなし。何故に云ふや。何故となれば、諸存在は空性にして、法の自性あることを認むべからざればなり。

① 本偈譯——「存在の無自性はなし」/dŋos-po ŋo-bo-Ŋid-Med Med/

② 十二門論の「觀性門」——「見有變異相、諸法無有性、無性法亦無、諸法皆空故。」

漢譯——左の偈文に相當するものは、梵藏兩原文、般若燈論、中觀釋論に缺く。

「諸法若無性、云何說嬰兒、乃至於老年、而有種々異。」

(4) 若し自性なければ、

//Gar-te ŋo-bo-Ŋid Med-na/

異に變するものは何ぞや、

/gShan-du hGyar-ba Grai-gi-Yin/

「若諸法有性、<sup>①</sup>「若し自性が無ければ、

//Kasay syād anyathā bhāvaḥ

云何而得異。」 何ものに付て變異があるや。」

svabhāvaḥ cen na vidyate/

/Wenn An-sich-Sein nicht ist, wessen ist Anders-sein (anyathā-bhāva, Veränderung)? (p. 74)

若し法の自性なくば、分位が異に變じて現するは何ものになるや。この故に世尊が虚妄なりと説き給へるは、諸の存在中に補特伽羅 (pudgala, Gaṇi-Zaḡ) は無自性の義なれども、法の無自性にあらず。

① 漢譯——第一句と第三句との次第を變更せり。

般若燈論——「自體若非有、何法爲變易。」

中觀釋論——「若法無自性、法云何有異。」

此に釋して曰、

(4)「若し自性存せば、

/Gaṇ-te 'No-bo-ñid 'Yod-na/

云何ぞ異に變するぞ。」

/ji-I-ta-Bur-na ḡShan-du ḡGyur/

「若諸法無性、<sup>①</sup>「若し自性があるならば、

/kasya syād. anyathā-bhāvaḥ

云何而得異」 何ものに變異ありぞ。」

svabhāvo yadi vidyate// (p. 241)

/Wenn An-sich-Sein ist, wie sollte Veränderung (anyathā-bhāva) sein? (p. 74)

若し法の自性あらば、そは云何ぞ異に變するぞ。<sup>②</sup>變異なければなり。

①「中論」の「觀有無品」第九偈——「若法實有性、云何而可異、若法實無性、云何而可異。」

② 原文 Rnam-par-lhGyur-ba ('Viparināma) 獨譯 Veränderung.

又復

(5)「其ものには異に變することなし、

他のものも亦有るに非ず、

何故ならば、青年は老いず、

何故ならば、老もまた老いず」

「是法則無異、<sup>②</sup>「此のものに變異は可能ならず、

異法亦無異、 他のものにも亦可能ならず、

如壯不作老、 壯者は老いず、

老亦不作壯。」 老者も亦老いざるが故に

/In diesem nämlich ist nicht Anderswerden, in anderen auch ist es nicht,

Weil ein Junger nicht alt wird, (und) weil ein Alter nicht alt wird./ (p. 74)

(p. 69a) 此にその承認せる存在に於て異の轉變は二種なり。其のもののか、若は異に變ずと計るとも、

二者の如きも亦認むべからず。何故に云ふや。何故とならば、青年はまた老いず、何故とならば、老も

亦老いざればなり。

① 本偈譯 /Gai-Phyir Rgas-paḥan Mi-Rgyaḥo/

② 「般若燈論」―「彼體不變異、餘亦不變異、如少不作老、老亦不作小。」

yasmāḥ jirṇo na jirya'e// (p. 241)

Yuvā na jiryate yasmād

nāpy anyasyaiva yuyate/

//Tasyaiva na-anyathā-bhāvo

/Gai-phyir Rgas-paḥan Mi-Rgyaḥo//<sup>①</sup>

/Gai-Phyir gShon-nu Mi-Rga-Sta/

/gShan-ñid-la Yai Yod-Ma-Yin/

//De-ñid-la-ni gShan-hgyur-Med/

「中觀釋論」若諸法即異、無異法可有、現住法若異、後變異不成。」

此に問て言く、若し其のものが異に變ぜば、其は何の過失となるや。此に釋して曰、

(6)「若し此のものが異に變ぜば、

//Gal-te ḥDi-Ñid gShan-Gyur-na/

乳は酪に變ずべし、」

/Ho-Ma-Ñid-ni Shor-ḥGyur-Ro/

「若是法即異、」若し此のものは異に變ぜば、

//Tasya ced anyathā-bhāvaḥ

乳應即是酪」 乳は酪に變ずべし」

ksīram eva bhaved dadhi/

/Wenn eben dieses ein anderes wird, so wird Milch eben Sauermilch/

若し其のものが異に變ぜば、斯くて乳は酪に變ずべし。是の如きものは認むべからず。云何に是を考ふるに、異が異に變ずと思惟せば、此に釋すべし。

① 本偈譯——Zor(桶)は誤。

(6)「乳より異なる何ものかによつて、

/Ho-ma-las gShan Grai-gis-ni/ ①

酪の存在は有りうべし」

/dNos-po Sho-ni Yin-par ḥGyur// ②

「離乳有何法」 乳より異なる何ものかに付て、

/Kṣīrāḍ anyasya kasya cid

而能作於酪」 酪の存在はあるべし、

dadhi-bhāvo bhaviyati// (p. 242)

若し異が異に變ずべしと思惟せば、乳より異の何ものかに依て酪の存在は有りうべし。是の故に二種もまた異に變ずことは認むべからず。

① 本偈譯 /Gan-shig-Ni/ (何もの)

② 同 譯 /Zo-Yi dños-po/ (桶の存在)は誤。

般若燈論—「異乳有<sub>二</sub>何物<sub>一</sub>、能生<sub>二</sub>於彼酪<sub>一</sub>」

中觀釋論—「若或異<sub>二</sub>於乳<sub>一</sub>、云何得<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>酪。」

此に問て言く、さらば今空と云へる其の究竟に達することありや否、此に釋して曰、

(7) 若し少分の不空あらば、

空もまた少分あるべし、

少分不空もあらざれば、

空もまた何處にか有らんや。」

「若有<sub>二</sub>不空法<sub>一</sub>、<sup>①</sup>「若し何か不空なるものが有らば、

則應<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>空法<sub>一</sub>、空なるものも有るべし、

實無<sub>二</sub>不空法<sub>一</sub>、不空なるものが何もなければ、

何得<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>空法<sub>一</sub>。」何處にか空なるもの有らんや」

//Gal-te Stoi-Mlin Cui-Zad-Yod/

/Stoi-paḥan Cui-Zad Yod-Par-ḥGyur/

/Ali-Stoi Cui-Zad Yod Mlin-Na/

Stoi-paḥan Yod-par Ga-la-ḥGyur/

//Yady aḥṇyain bhavet kiñcit

Syāc chūnyam iti Kiñcana/

Na kiñcid asṭy aḥṇyain ca

kutaḥ cūnyain bhaviṣyati// (p. 245)

/Wenn irgendwelches Nicht-leeres wäre, so würde auch irgendwelches Leeres Sein ;

Wenn irgendwelches nicht-leeres nicht existiert, woher sollte Leeres auch existieren? (p. 75)

若し少分の不空が有りうるならば、其れに由てかの反對の空もまた少分あるべし、少分の不空もありと是の如く承認せられず、かの反對なきが故に、空もまた何處にか有らんや。

① 般若燈論―「若一法不空、觀此故有<sub>レ</sub>空、無<sub>二</sub>一法不空<sub>一</sub>、何處空可得。」

中觀釋論―「若有<sub>二</sub>不空法<sub>一</sub>、即應<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>空法<sub>一</sub>、無<sub>二</sub>少不空法<sub>一</sub>、何得<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>其空<sub>一</sub>」

復曰、

(8)「諸の勝者によりて空性は、

一切見を決定して出離すと説かれたり、

凡そ空性の見あるものは、

彼等を成(化)せらるゝことなしと説かれた

り。」

「大聖說<sub>二</sub>空法<sub>一</sub>、

「空性は一切の見の捨離なりと、

//gñyātā sarva-dīṣṭhānān

爲<sub>二</sub>離<sub>三</sub>諸見<sub>一</sub>故、

諸の勝者に依て説かれたり、

Proktā nīṣaraṇān jinañ/

若復復見有<sub>レ</sub>空、然るに尙空見あるところのものは

Yeṣāṃ tu gūnyatā-dīṣṭis

諸佛所不<sub>レ</sub>化。」 彼等を不所成なりと説かれたり」

tān asādhyaṃ babhāṣire// (p. 247)

/Durch die Sieger (jina) ist die Leerheit als der Ausgang (niḥsaraṇa) aller Ansichten verkündet.

Deren aber die Ansicht der Leerheit ist, die werden als nicht-erreichend (Sc. den Sinn der Leere) bezeichnet/ (p. 75)

諸佛世尊によりて空性は一切見の反對なるが故に、一切見より決定して出離すべきを説かれしかば、凡そ空性の見あるものは、彼等を成(化)せらること能はずと (p. 69) 説かれ、禪(bSam-gTan, Dh-yāna)の頭に於ける頭蓋骨の如し。

① 本偈譯 /Rgyal-ba Rnams-kyir Stoi-pa-ñid/

② 般若燈論—「如來說空法、爲出離諸見、諸有見空者、説彼不可治。」

中觀釋論—「遣有故説空、令出離諸見、若或見有空、諸佛所不化。」

月稱造「入中道自疏」(dBu-Ma-la bjug-pa'i Rañ-ḥgrel-bshugs-So; p. 119) に曰、

「又論に據れば、

「空性は一切の見を、

/Stoi-ñid lta-ba Thams-cad-Ni/

決定して出離すと勝者に依て説かれたり、

/ñes-par ḥByin-par Rgyal-bas gsūns/

凡ての空性の見(あるもの)は、

/Grin-Dag Stoi-pa-ñid lta-ba/

彼等を成(化)せらることなしと説かれたり」

/De-Dag Sgrub-tu Med-par gsūns//

阿闍梨耶聖龍樹に依て造られたる「根本中(論)無畏疏」内、眞實性を觀ずと名けらるゝ第十三品なり。

② (De-kho-na-Ñid bRtag-pa Shes-Bya-Ste Rab-tu-Byed-pa bCu-gSum-pa)ho)

① 眞性

De-kho-na-Ñid=latva (by Mahayutputti)

眞如

De-bShin-Ñid=iahata (〃)

如實

Yañ-Dag-pa=Samyak (〃)

## 「觀 品」第十四 (Samsarga-parikṣā)

此に問て曰、諸の存任は自性 (Svabhāva, No-Bo-Ñid) あるのみなり、世間に於て會合を見るが故なり。此に釋して曰、

先に「觀根品」(第三觀六處品)に於て、所見と見と見者との三者等には所作は認むべからずと、廣く觀察したる其等と異別なきが故に、今は云何に相互に會合を認むべからずと是の如く説かれたり。そは是れを思惟するに、何の正理に由て斯く釋せらるゝや。

(1)「所見と見と見者と、

//bIra-Bya lta-ba lta-ba-Po/

是等の三者は二と二と、

/gSum-po De-Dag gÑis-gÑis Dai/



一切とは亦相互に、

會合すること有るに非ず。」

「見、可見、見者、

「見るもの」と、見るものと、  
見る者との

是三各異方、

是等の三は二つと

①如是三法異、

一切とが又相互に、

從無有合時」

結合すること決してなし」

/Zu Sehendes, Sehen, Seher; diese drei

Vereinigen sich überall nicht wechselseitig zu je zweien / (p. 77)

所見 (blta-bar Bya-ba) とは根の意義 (Don, artha, 境) なり。見 (lta-ba) とは根 (dBaṅ-Po) な

り、見者 (lta-ba-Bo) とは我 (ātma, bDag) なり。所見と見と見者との是等の三者は二と二と一

切とは亦相互に會合せざるなり。所見と見ともまた會合せず。所見と見者ともまた會互せず、見と

見者ともまた會合せず、所見と見者ともまた會合せず。燈と闇との如し。

① 般若燈論—「二二互相望、一切皆不合。」

②「是の如く染と染者と、

//De-bShin bDod-Chags Chags-pa Dai/

所染と煩惱と、

諸餘(の煩惱)もまた入の、

餘とはまた三種に由て見らる」

「染<sup>④</sup>與<sup>④</sup>於可染、

/Chags-pur-Gyur Dan ñois-Mlois-pa/  
//Lhag-Ma-Rnams kyai Skye-mChed-kyi/  
//Lhag-Mahai Rnam-pa gSum-Gyis blta//  
④ //Evain rāgaḥ ca rakṭāga

染者亦復然、

所染と亦是の如く見らるべしなり

rañjanīyam ca dīḥyatām/

餘入餘煩惱、

諸の諸煩惱も餘の入も、

Traidhena ḥoṣāḥ kleśāḥ ca

皆亦復如是」

亦此三種によりて見らるべしなり」

ceṣṭāy āyatanāni ca// (p. 251)

/So betrachte man Leidenschaft, Leidenschaftlichen, Gegenstand

der Leidenschaft (rañjanīya),

Auch die übrigen Qualen (Kleśa) und die übrigen āyatanas (Sinnesgebiete) auf drei Arten/

(p. 77)

云何ぞ所見と見と見者等は、二と二と一切とは亦相互に俱に會合せず、是の如く染と染者と所染等も亦二と二と一切とは亦相互に俱に會合せず、染と染者とも會合せず、染と所染ともまた會合せず、染者と所染ともまた會合せず、染と染者と所染ともまた會合せず。是の如く煩惱は餘の諸の瞋恚等と入の餘の聲と聽と聽者等もまた二と二と一切とは亦相互に俱に會合せざるを三種によりて見るべ

きなり。

- ①② 原文 hDod-Chags Chags-pa は貪慾と貧者、又は愛慾と愛者と譯出すべきものとす、今は漢譯に従ふ。獨譯マレンザー氏の Leidenschaft (情、激情、慾) は誤りであり、Schmidt 氏の藏字典に hDod-Chags-Begierde, Lust (色慾、欲望) とあるは可なり。
- ③ 原文 Chags-par-Gyur は本偈に Chags-par Bya-Ba (所染) とあり。
- ④ 般若燈論「應知染々者、及彼所染法、餘煩惱餘入、三種皆無合。」

此に問て曰、何の故に其等の所見等は相互に俱に會合せざるや。此に釋すべし。

(3) 「異は異と會合するとき、

何故に所見等に於ては、

かの異は有るに非ず、

この故に會合せざるなり。」

① 「異法當有合、  
「異は異と會合することあり、

見等無有異、  
而も所見等のものに取つては、

異相不成故、  
異性は存せず、

見等云何合。」  
其故に其等は會合に至らず」

//gShan gShan Dai Phrad-Gyur-Na/

//Grñ-Phyir blta-Bya-ba Ia-Sogs-Ia/

/gShan De-Yod-pa Ma-Yin-Pa/

/De-Phyir Phrad-pa Mi-l-Gyur-Ro//

//Anyena-anyasya saṃsargas

tac ca anyatvaṃ na vidyate/

Draṣṭavya prabhīṭināṃ yan

na saṃsargaṃ vrajanty atah// (p. 251)

/Wenn anderes sich mit anderem vereinigt, weil in dem zu Sehendem usw.

Jenes andere nicht existiert, deshalb ist nicht Erreichen/ (p. 78)

こゝに是等は異なるとき、異と會合するに至るべしと謂ふ、何が故ぞ、所見等は正理に由て觀索するに、かの異有ることなし、それ故に會合せざるなり。

① 般若燈論「異共異有合、此異不可得、及諸可見等、異相皆不合。」

(4)「只、所見等に、

異性なきのみならず、

誰が誰と俱なるも、

異性に於ては認むべからず」

②「非但可見等、」

異相不可得、

異性があるのみならず、

所有一切法、

誰に付て誰と俱なるも、

皆亦無異相」

その異性は生ぜず」

na-amyatvam upapadyate// (p. 252)

/Nicht nur bei zu Sehendem usw. existiert nicht Anderssein,

//bl'a-Bya la-Sogs hBah-Shig-La/

/gShan-ñid Med-par Ma-Zad-kyi/

/Gai-Yai Gai-Dai lhan-Cig-tu/

/gShan-pa-ñid-du Mi-ljThad-Do//

//Na ca kevalam anyatvam

draṣṭavyāder na vidhyate/

kasya cit kena cit sārthanī

Was immer mit wem immer zusammen ist, (da) trifft Anderssein nicht zu/ (p. 78)

只所見等の其等には相互に異性を認むべからざるのみならず、是の如くあらゆる存在と、あらゆる存在とは俱に異性を認むべからず。異性なければ、あらゆる誰が誰と俱に會合することは認むべからず。

① Walleser 氏 獨譯 immer (常に)は誤。

② 般若燈論—「非獨可見等、異相不可得、及餘一切法、異亦不可得。」

此に問て曰、云何なる正理に由て異性は認むべからざるや。此に釋す。

(5)「異は異に緣りて異なり、

異なくも異より異とならず、

何に緣りて何があるとも、

そは其れより異は認むべからず」

「異<sup>②</sup>因異有異、 「異は異に緣りて異なり、

異離異無異、 異なくして異より異ならず、

若法從因出、 而して或ものに緣りて此のものが

//gShan-Ni gShan-I-as bKten-te gShan/

/gShan-Med gShan-I-as gShan Mi-ñGyur/

/Grat-I-a bKten-te Grati-Yin-pa/

/De-ni De-I-as gShan Mi-ñThad//

//Anyad anyat pratitya-anyan

na-anyad anyad ñite 'nyatañ/

Yat pratitya ca yat t ismāt

是法不異因

其れより異なるものは  
有り得ざるなり」

tad anyan na-upapadyate// (p. 232)

/Anders ist von anderem abhängig, anderes ohne anderes ist nicht von anderem anderes

(d. i. verschiedenes);

Wovon was abhängig ist (d. h. wenn etwas von etwas abhängig ist), das ist nicht als von  
diesem verschieden (eig. anderes) abhängig/ (p. 78)

ここに汝は異なりと云へるを現に執望する總てのものは、只そは其れを離れて異に縁りて異となる  
ことあるも、異なければ、異は自らを離れて異とならざるべし。

① 本偈譯と左の如く多少の相違あり。

「異は異に縁りて異なり。

異なくして異は異とならず。

何に縁りて何があるとも

そは其れより異なば認むべからず」

② 般若燈論「異與異爲緣、離異無有異、若從緣起者、此不異彼緣」

又復 (p. 70b)

何に縁りて何を生ずるも、そは其れを離れて異あると認むべからず。此に問て曰、著し異あらば

其に由て何の過に墮するや、此に釋すべし。

(6)「若し異が異より異ならば、

① //Gal-te gShan-ni gShan-Las gShan/  
/gShan-Med-par Yai Ruin-bar-hGyur/  
/gShan-Las gShan-pahi gShan-pa De/  
/Med-Na Med-pas De-Phyir-Med//

異なくもまた適當なるべし、

異より異なるものゝ、かの異は

無ならば無の故に、此の故になし」

②「若離從異異、」 「若し異は異より離れても、

//Yady anyad anyad anyasmād

應餘異有異、

(異は)有るべし、

anyasmād apy yite bhavet/  
Tad anyad anyad anyasmād

離從異無異、

其(の)異(は)異より離れてあり、

是故無有異。」

それ故に異は存せず」

yite nāsti ca nāsti atah// (p. 253)

/Wenn anderes von anderem verschieden (eig. anders) wäre, so wäre es auch ohne anderes möglich ;

Da es ohne das von dem anderen verschiedene (eig. andere) nicht existiert, existiert es nicht/  
(p. 79)

若し何に緣りて異となるも、其れを離れて異ありうるならば、かの異なきも、また是の如く適當になりうるが故に、それは認むべからず。云何に是れを考ふるに、異は異に緣りて異となるべしと思

惟せは、何が故にかの異と異なる異なきとき、異なきが故に、自らより異性にならざるべし、この故に異なきのみなりと知れ。

① 本偈譯と多少の相違あり。

「若し異が異より異ならば、

そのとき異なくも異となるべし、

異なくして異となることは、

有ることなし此の故になし。」

② 般若燈論に此偈文缺。

此に問て曰、緣起とは異性に非ざるも、されど異性と云はるゝ彼のあらゆる一般のものに觀待して、かの異性となるべし、此に釋すべし。

(7) 異性は異中にあることなし、

不異中にも亦有ることなし、

異性あるに非ざれば、

異若は其者も有ることなし。」

② 「異中無異相、」 「異性は異中になく

//Gar-te gShan-Ni gShan-Las gShan/

/De-Tshe gShan-Med gShan-hGyur/

/gShan-Med-pa-Ni gShan-hGyur-ba/

/Yod-Mlin De-Yi-Phyir-Na Med/

//gShan-ñid gShan-la Yod-Mla-Yin/

/gShan Mla-Yin-lahan Yod-pa-Mlin/

/gShan-ñid Yod-pa Mla-Yin-Na/

/gShan-Nam De-ñid Yod-Mla-Yin//

//Na-anyasmin vidyate nyatvam



不異中亦無、 不異中にもなし

ananyasmin na vidyate/ (p. 254)

無有異相故、 異性知れざるを

Avidyamāne ca anyatve

則無此彼異。」 異若は其者も存ぜず」

nāsty anyad vā tadeva vā// (p. 255)

/Anderssein existiert nicht im anderen, im nicht-andereu auch existiert es nicht;

Wenn Anderssein nicht existiert, so existiert nicht anderes oder dasselbe/ (p. 79)

汝は異性と云へるあらゆる一般のものに觀待して、異となるべしと説けり、此の故に斯くては縁起 (pratyā-samutpadā, Rten-Cin hBrel-bar-hByun-ba) なりと云ふ説明に非ずや。又異性と云へる彼あらゆるものは、また存在に縁りつゝ觀待して成ずるが故に、そは存在を離れて異中にも亦あらざるが故に、異性有るに非ざれば、異若は不異そのものなりと觀察するところの其の二者もまた有ることなし。

① 般若燈論—「異中無有異、 不異中亦無、 由無異法故、 不異法亦無。」

又復

(8)「其は其と會合なし、

//De-Ni De-Dai Phrad-pa-lled/

異と異とは亦會合するに至らず、

① /sShan Dain sShan Yain Phrad Mi-hGyur/

會合しつゝあるものと會合したるものと

/Phrad-bShin-pa Dan Phrad-pa Dan/

會合者とはまた有ることなり。」

/Phrad-pa-po Yai Yod-Ma-Yin//

「是法不自合」<sup>②</sup> 「此と此との結合も

//Na tena tasya saṁsargo

異法亦不<sub>レ</sub>合、

異と異との結合も妥當ならず、

na-anya-na-anya-sa yujyate (p. 255)

合者及合時、

結合せられつゝあるものと  
結合せられるものと

Saṁsṛjyamānāni sa'isṛjstāni

合法亦皆無。」

結合するものとは存せず。」

saṁsṛjṣṭā ca na vidyate// (p. 256)

/Dieses vereinigt sich nicht mit diesem, ein anderes auch vereinigt sich nicht mit anderem ;

Das sich Vereinigende das Vereinigen, der Vereiniger auch existieren nicht/ (p. 80)

此は此と會合せざることなし。何の故に言ふや。一なるが故にして、其者と其とは會合せざるが故なり。異と異とはまた會合せず、何の故に云ふや。異なればなり。異等 (Thad-Dad-pa-Dag) は、會合を欲せざるが故に、(その) 必要なきが故なり。是の如く何故ならば、廣く觀察するに、諸法に會合することは認むべからず、この故に會合しつゝあるものと、會合と會合者とは亦あることなし、天と地との如し。

① 本偈譯

「異は異と會合せず」/gShan-Ni gShan Dan Phrad-Mi-jGyur/

② 般若燈論—「一法則不合、異法亦不<sub>レ</sub>合、合時及已合、合者亦皆無。」

阿闍梨耶、聖龍樹によりて造られたる「根本中論無畏疏」内、觀合と名けられて、第十四品なり」  
(Phrad-pa bRtag-pa Shes-Bya-ba-Sre, Rab-du-Byed-pa bCu-bShi-pa'ho)

### 「觀<sup>①</sup>有無品」第十五(Svabhāva-parīkṣā)

此に問て曰、諸の存在は自性あるのみなり、別々の所作(kṛtya, 作用)を爲し能ふところに示現するが故に、その如く瓶の自性(Nō-Bo-Nīd)と、毛布の自性等は亦諸の因と緣(pratyaya, Rkyen)とより生ずるが故なり。

① 梵文題品「自性の觀察」と名けらる第十五品。」

漢譯題品「觀有無品」は西藏原本の卷末に「存在と無存在との觀察と名けられて」(dños-po Duñ dños-po-Med-pa bRtag-pa Shes-Bya-ba-Sre)とあつて、藏漢兩文一致する。藏文 dños-po bñāva(存在)であり、dños-po-Med-paは abhāva(非存在)であるから、是れを「有と無」との意に譯出せられて漢譯に相應す。梵題の自性(svabhāva, Nō-Bo-Nīd)とは、存在、物、現象の本質、又は實體を意味し、存在(諸法)をして存在あらしむる實體是れを自性と名けらる。本品は存在物あらしむる自性を否定することがその主題である。故に藏漢二譯一致と梵題とは、存在と自性との關係を闡明する意味に於て三者は悖るものに非ず。

此に釋すべし。(p. 71a)

(1)「自性は因と縁より、

生ずるとは正しからず。」

④「衆縁中有性、」自性の發生は

是事則不然。」諸の縁と因によりて結合せられず

yuktāḥ pratyaya-hetubhiḥ

/Es ist nicht richtig (Yukta), dass An-sich-Sein aus Ursache und Wirkung hervorgeht/ (p. 81)

自性は諸の因と縁とより生ずるとは正しからず。そこにはれを考ふるに、若し自性は諸の因と縁とより生ぜば、それに由て何の失となるべしと思惟するや。

① 原文 No-Bo-Ñid(自性)——Svabhāva(それ自らの存在)、(本質)

本偈文譯——Raṇ-bShin (prakṛti, 本性)とあり。

②③ Rgyu-Rkyen-hetu-Pratyaya (因、因縁と條件)

④ 般若燈論——「法若有自性、從縁起不然。」

此に釋すべし。

(2)「因と縁とより生じたる、

自性は所作となるべし。」

②「性從衆縁出、」因と縁より生じ、

/Rgyu Dan Rkyen-Las Byun-ba-Yi/  
① /No-Bo-Ñid-Ni Byas-par-Gyur//  
/Hetu-pratyaya-saibhūṭāḥ

即名爲作法」 自性は所作となるべし。

svabhāvaḥ kṛitako bhavet // (p. 259)

/Ein aus Ursachen und Bedingungen hervorgegangenes An-sich-Sein wäre künstlich (kṛitaka) /  
(p. 81)

諸の因と縁より生ぜば、自性は所作のものなりとの過失を其處に成ずべし。

① 本偈文譯——Rai-bShin Byas-pa-Can-du-ḥGyur (本性は所作を有すべし)

② 般若燈論——「若從『因縁』起、自性は作法。」

此に問て曰、

(2) 「自性は所作なりといふ、

//No-Bo-Ñid-Ni Byas-pa Shes/

云何なるものに於て適するや、

//Ji-I-ta-Bur-Na Ruñ-bar-ḥGyur/

自性は爲作に非ず、

//No-Bo-Ñid-Ni bCos-Min Dai/

他に觀待することなきものなり。」

//gShan-la bltas-pa Med-pa-Yin//

③ 「性若是作者、」 自性は實に云何なる方法にて、

//Svabhāvaḥ kṛitak nāma

云何有『此義』

復所作のものとなるなえん、

bhaviṣyati punaḥ kathari/ (p. 260)

性名爲『無作』

非所作なる自性は

Akṛitimaḥ svabhāvo hi

不待『異法』成」

又他の場處に觀待を有せず」

nirapekṣaḥ paratra ca// (p. 262)

/Wie wäre An-sich-Sein als „künstlich“ möglich?

An-sich-Sein is nicht künstlich und existiert nicht (als) abhängig von anderem/ (p. 81)

自性は所作なりと云へるは、云何なるものに適するや、何故とならば、自性は爲作(爲)に非ず、他に觀待することなきことあればなり。

① 本偈譯—「本性は所作を有すと云ふは」*Ran-bSiin Byas-pa-Can Shes-byar/*

② 原文—*bCom*(人爲)、獨譯 *künstlich*(人工)

③ 般若燈論—「若有『自性』者、云何當『可』作。」

原文第三偈、第四偈に相應する偈文は般若燈論に缺く。

此に問て曰、若し自性なくば、されば今他の存在はあるべし。此に釋すべし。(p. 71b)

(3)「自性は有るに非ざれば、

他の自性は何處にかあらん、

他の存在の自性は、

他の存在なりと稱せらる。」

①「法若無自性、」

//*Kutaḥ svabhāvasya-abhāve*

云何有他性、

*Prabhāvo bhaviṣyati/* (p. 355)

自性於他性、 他的存在の自性は、

Svabhāvaṃ parabhāvasya

亦名爲『自性。』 實に他の存在と語らるればなり。」

parabhāvo hi kathyate/ (p. 266)

/Wenn An-sich-Sein nicht existiert, woher wäre Anderssein (parabhāva)?

Eines anderen Dinges An-sich-Sein wird Anderssein genannt/ (p. 82)

若し自性が有るに非ざれば、今他の存在は何處にか有らん。何が故となれば、他の存在の彼の自性は、他の存在なりと稱せられなば、かの自性をまた廣く觀察するに認むべからず、この故に他の存在もまた無きなり。

① 般若燈論——「法既無『自性』、云何有『他性』」

原文第三、第四の兩句に相當するものを缺く。

此に問て曰、自性と他の自性なくなるとも、また存在はあるべし。此に釋すべし。

(4)「自性と他の存在等を、

//Ño-Bo-Ñīd Dai gShan dÑos-Dag/

除きて自在は何處にかあらん、

/Ma-gTogs dÑos-po Ga-la Yod/

自性と他の存在等とが、

/Ño-Bo-Ñīd Dai gShan dÑos-Dag/

有らば存在に成すべし。」

/Yod-Na dÑos-po lGrub-par-lGyur/

「離<sub>レ</sub>自性他性」 「自性と他の存在とな

// Svabhāva-parabhāvavyāṁ

何得更有法、 離れて存在は復云何ぞあらんや、

rite bhāvaḥ kutah punaḥ/

若有<sub>レ</sub>自他性、 自性若は他の存在が、

Svabhāve parabhāve vā

諸法則得<sub>レ</sub>成」 あらば存在は實に成すべし、

sati bhāvo hi siddhyati// (p. 266)

/Ohne An-sich-Sein und Anderssein : woher (kann Sein) (bhāva) existieren ?

Wenn An-sich-Sein und Anderssein existieren, wird Sein (bhāva) erreicht/ (p. 82)

自性と他の存在等を除ける存在は何處にかあらんや。何の故に云々や、是の如く自性と他の自性等が有らば 存在は成じうるが故なり。

① 般若燈論「自他性已遣、何處復有<sub>レ</sub>法。」

原文第三、第四の兩句に相當する漢譯偈文を缺く。

此に問て曰、然らば今無存在ものあるべし。此に釋すべし。

(5) 若し存在が成せずば、

// Gal-te dÑos-po Ma-Grub-Na/

無存在も成せざるべし、

/dÑos-Med hGrub-par Mi-hGyur-Ro/

存在が異に變することな、

/dÑos-po gShan-du hGyur-ba-Ni/



無存在なりと人は言ふ。」

//dÑos-Med Yin-par Skye-Bo Smra//

「有若不成者、〔若し存在が不成就ならば、

//Bhāvasya ced aprasiddhir

無云何可成、 非存在も實に成ぜざるべし、

abhāvo naiva siddhyati/

因有々法故、 存在の變異を

Bhāvasya hy anyatābhāvam

有壞名爲無。〕 非存在なりと人々は語る」

abhāvaṁ bruvate janāḥ// (p. 267)

/Wenn Sein nicht erreicht wird, wird Nichtsein nicht erreicht.

Eines Seins (bhāva) Anderssein nennen die Leute „Nicht-sein.“ (p. 82)

若し存在が認承せらるゝとも、それは能く成ぜざるべし、さらば今無存在もまた能く成ぜざるにあらざるや否、何の故に云ふや、存在が異に變ずることを、其は無存在なりと人々は言ふが故なり。

① 般若燈論―〔若人見自他、及有體無體、〕

原文第三、第四の兩句に相當するものを缺く。

此に問て曰、爰に存在の眞實性を見るが故に解脱すべしと云はるゝことあり、この故に諸の存在の自性もまたあるべし。此に釋すべし。

(6)〔あらゆる存在と他の存在と、  
① //Grāi-Dag dÑos-ñid gShan-dÑos Dan/

存在と無存在とを見るところの、

彼等は佛の教に於て、

眞實性を見ざるなり。」

「若人見有無」

「自性と他性と、

見自性他性」

また存在と非存在とな、

如是則不見」

見るところの彼等は、

佛法眞實義」

佛の教に於ける眞實性を見ず」

/Welche eben An-sich-Sein und Andersein, Sein und Nichtsein sehen,

Die schauen nicht der Buddhalehre Beschaffenheit/ (p. 82)

あらゆる存在と他の存在と、存在と無存在と名けらる四種を見る彼等は、佛世尊の (p. 71a) 教に於て眞實性 (Tattva, De-Kho-Na) を見ざるなり。

① 本偈譯「あらゆる本性と他の存在と」/Gai-Dag Ran-bShin gShan-dÑos Dai/

④ ③ 原文 De-Ñid (tattva) は婆羅門哲學に用ひらる用語にして實性、眞實性と譯出せる語にして、英語の That-ness はその對譯である。しかし根本佛敎では tathatā (tatha+ta) = suchness (如) である。如來の語原 tathā+gata = De-Ushin-g-Cegs pa (如に去きし人) は正しく tathatā (眞如) の起源を示すものである。後代に於て此兩語は混同せられて、佛敎敎學内に併

/dÑos Dai dÑos-Med-Ñid I-a-ba/

/De-Dag Sams-Rgyas bStan-pa-I-a/

② /De-Ñid mThoi-ba Ma-Yin-No//

//Svabhāvān parabhāvān ca/

bhāvān ca a'hāvam eva ca/

Ye paṇyanti na paṇyanti

③ te tattvān buddha-gāṣane// (p. 267)

用さるに至つた、龍樹も亦その一人である。

③ 般若燈論—「彼則不能見」 如來眞實法—

又復

(7) 世尊は存在と非存在とを、

教へて迦旃延の、

訓誡には有と、

無との二を遮し給へり。

④ 「佛能滅有無」 「また迦旃延の教化に於て、

如化迦旃延」

有と無との二が、

經中之所説、

遮せられたり、存在と非存在とな

離有亦離無。」

説き給ひし世尊によりて。」

/Der Erhabene, Sein und Nichtsein erörternd (eig. lehnend),

Hat im Kātyāyanāvāda beides, Sein und Nichtsein widerlegt/ (p. 89)

何故ならば世尊は存在と無存在と教へて、「迦旃延の訓誡と名けらる經」中に、又有と無との二者を

//bCom-I-dan dÑos Dan dÑos-Med-pa/

/Ston-pa kaḥa-tyḥayana-Vi/

/gDams-Nag-I-as-Ni Yod-pa Dan/

/Med-pa gÑi-Gaḥai dGaḡ-pa mDsad//

//kātyāyana-avavāde ca

astīti nāstīti ca-ubhayāni/

Pratīdīdham bhagavatī

bhāva-abhāva vibhāvīnā// (p. 269)

遮し給へり、それ故に存在と無存在とを見るところの其等を離るべきなり。

① 原文 *kaityana* 「異部宗輪論に佛滅後三百年に上座部は分裂して二派となり、一に説一切有部、二に雪山住部(本上座部)なり。この上座部の開祖は迦多延尼子なりと云へり」

本偈文の迦旃延は部派分裂の開祖と同名異人なり。

② 本偈譯「無との二者を遮すべく説き給へり」*/Med-pa gNis-ka dGag-par gSuns/*

③ 般若燈論「佛能如實觀、不著有無法、教授迦旃延、令離有無二」

## 又復

(8) 「若し本性に(由て)有性が(あらば)、

そは無性とならず、

本性が異に變ずることは、

決して認むべからず。」

② 「若法實有性、」 「若し本性有があらば、

後則不應無、」 それらの無はあらざるべし、

性若有異相、」 本性の異相は、

是事終不然。」 決して生ぜず。」

*/Gal-te Rān-bShin Yod-Nid-Na/* ①

*/De-ni Med-Nid Mi-hGyur-Ro/*

*/Rān-bShin gShan-du hGyur-ba-Ni/* ②

*/Nam-Yān hThad-par Mi-hGyur-Ro//*

*//Yady asitivan prakṛityā syān*

*na bhavet asya nāstī/*

*Prakṛiter anyathābhāvo*

*na hi jānu upapadyate//* (p. 271)

/Wenn Sein (astīva) von sich aus (rai bShin, Prakṛityā) wäre, so würde nicht dessen Nicht-sein;

Dass etwas von sich aus seiendes wird, ist niemals angängig/ (p. 83)

若し本性に由て有性があらば、斯くては其は無性とならず。何の故に云ふや、本性が異に變ずることとは決して認むべからざるが故なり。

- ① 本偈文譯—「若し自性に由てあらば」/Gar-te Rai-bShin-gyi Yod-Na/
- ② 般若燈論—「若有是自性、則不得言、無自性有異者、畢竟不應然。」
- ③ 原文 Rai-bShin(prakṛiti)は數論の語にして、神我に對して用ひらる、自性、本性と譯され  
てあり。 Prakṛiti=the original or natural form or condition of anything; making or placing before or at first.

又復

(9)「本性は有らざることを、

何の異に變ずるや、

また本性は有なるとき、

云何ぞ異(相)に變ずるに適せん。」

①「若法實有性、」 「本性が無なるとき、

//Rai-bShin Yod-pa Ma-Yin-Na/

/sShan-du hGyur-ba Grai-gi-Yin/

/Rai-bShin Yod-pa Yin-Na Yan/

/sShan-du hGyur-par Ji-I-ta-Ruin//

//Prakṛitan kasya ca-asatyām

云何而可異、

何ものに異相あるべし、

anyathātvain bhaviṣyati/ (p. 271)

若法實無性、

又本性の有るときに、

Prakīrtan kasya ca satyām

云何而可異。」

何ものに異相となるべし。」

anyathātvain bhaviṣyati// (p. 272)

/Wenn von sich aus seiendes auch existiert, wessen ist Anderssein?

Wenn von sich aus seiendes auch existiert, wie ist Anderssein möglich? (p. 272)

本性有らざるとき、かれは何の異(相)に變ずるや。本性有るとき、又云何ぞ異(相)に變ずるに適せん。

① 般若燈論—「若無自性者、云何而可異、實無有一法、自性可得者。」

又復

(10)「有なりと云ふは常の執なり、

//Yod Ces-Bya-bur Rtag-par-ḥDsin/

無なりと云ふは斷の見なり、

//Med Ces-Bya-ba Chad-par Ita/

それ故に有と無とに、

/De-Phyir Yod Dan Med-pa-Ia/

賢者は住すべからず。」

//mKhas-pas gNas-par Mi-Bya-ḥo//

①「定有則著常、

「有と云ふは常の執なり、

//Astiti gāyāta-grāho

定無則著斷、 無と云ふは斷の見なり、 nastity ucheda-darṣanaṁ // (p. 272)

是故有智者、 それ故に有性と無性とに於て、 Tasmād astitya-nāstivo

不應著有無」 賢者は依るべからず。 na-āgriyeta vicakṣaṇaḥ // (p. 273)

„Es ist“: das ist Ewig (keit) ergreifen, „Es ist nicht“: das ist Vernichtungsansicht (ucheda-darṣana).

Deshalb darf sich der Weise nicht auf Sein und Nicht-sein stellen/ (p. 83)

有なりと云ふ、是の如く現に望(執)せば常執なるが故に、無なりと云ふ、是の如く現に望(執)せば斷見なるが故に、此の故に有性と無性とに賢者は住すべからず。

① 般若燈論「有者は常執、無者は斷見、是故有智者、不應依有無。」

此に問て曰、云何にして常と斷との見に墮するや。此に釋すべし。

(11)「若し自性が有なれば、 //Gaṇ-Shig No-Bo-Nid Yod-pas/

そは無に非るが故に常なり、 /De-Ni Med-pa Min-pas Rtag/

先有今無なりと云ふ、 /Siṅg-hbyun Da-lkar Med Ces-pa/

斯くては斷に墮すべし。」 /Des-Na Chad-par Thal-bar-hṭṭyur//

「若法有『定性』」

「自性によりて有なるといふの、

//Asi Yād dhi svabhāvena

非無則是常、

其ものは無なりと云ふは常なり、

na tan nāstīti gaḥvatain/

先有而今無、

先きに有りしも今は無しといふ、

Nāsti-idānām abhūt Pūrvam

是則爲斷滅」

(かくつは)斷と執着すべし。

ity ucchedaḥ prasaṅgate// (p. 273)

/Was mit An-sich-Sein ist, das ist weil nicht Nicht-sein ist, ewig; (p. 83)

Früher war (h)Byuñ, entstand es, jetzt ist es nicht“; so trifft Vernichtung zu./ (p. 84)

若し自性に由て有ならば、そは後に無性なりとは認むべからず。本性は轉變せざるが故に、それ故に (p. 72n) 有性の見より常見に墮すべし。かの存在は「先きに生ぜしも今無なり」(先有今無 *Shon-byuñ-ba Da-Iar-Aled-Do*) とは、存在の有を滅する見なり、斯くては斷見に墮すべし。

是の如く何の故ぞ、諸の存在に於て有性と無性との見に多くの過失となるべしと云ふ、それ故に諸存在は無自性なりと云ふ、是れのみ(性<sup>眞</sup>)を見るものにして、中道 (*dBu-A-lahī I-am*) なるが故に眞實性の眞義を成すなり。

① 般若燈論—「若法有『自性』、非無即是常、先有而今無、此即是斷過。」



阿闍梨耶、聖龍樹によりて造られたる「根本中論無畏疏」内、「存在と無存在とを觀すると名けられて、第十五品なり」(dNos-po Dau dNos-po-Med-pa bRtag-pa Shes-Bya-ba-She Rab-tu-Byed-pa bCo-Lna-paṅo)